京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十三卷　第四號

大正十年十月一日發行

論叢

所得稅の弱點　法學博士　神戸正雄

社會的法的經濟學の考察　文學博士　米田庄太郎

利潤の經濟的及び道德的性質　法學博士　田島錦治

農業勞働問題　法學博士　河田嗣郎

時論

地方稅の整理を論ず　法學博士　小川鄉太郎

說苑

家計論の地位に就て　法學士　作田莊一

井リヤム・タムスンの分配論　經濟學士　堀經夫

雜錄

獨逸側より見たる聯合國の對獨經濟政策　法學士　小島昌太郎

世界戰爭と伯林の人口　法學士　汐見三郎

雜錄

獨逸側より見たる聯合國の對獨經濟政策

小島昌太郎

軍國主義を背景として世界的の大商工國たらんとしつゝありし獨逸帝國は、その軍國主義の爲めに却つて破壞せられて仕舞うた。英吉利は平和主義の假面の下に、商工的大帝國を建設するに成功し、功利的外交と經濟的封鎖戰とによりて、世界大戰に勝利の榮冠を贏ち得て、更にその海商國たるの基礎を固くすることが出來た。戰敗の獨逸が再び商工國として復活し得るや否やは興味ある問題であらねばならぬ。而してその成否は、一は獨逸國民の努力如何に懸り、一は、今は外交上殆ど無力に近き獨逸に對する聯合諸國の態度如何に懸る。聯合國の獨逸に對する經濟政策は果して如何なるものか。以下掲ぐる所は匿名の獨逸經濟學者の見たる聯合國の對獨經濟政策と、そが獨逸の對外貿易に及ぼせる影響とである。

「敵國側(聯合國側)の、獨逸輸出貿易に制裁を加へんとする周到なる計劃は、獨逸商品の仕向國に對しても目を振向けた。一九一四年以來、獨逸の輸出販路に非常な變化を來したことは、既に明かなる事柄である。*并し其變化が如何なる程度のものであるかは、統計局發行の『經濟と統計』**五月號に掲載せられたる次の數字が物語つて居る。

仕向國	輸出金額(單位百萬馬克) 一九一二年(一月から三月八月)	一九一三年(八ヶ月)	輸出總額に對する歩合 一九一二年(一月から三月八月)	一九一三年(八ヶ月)
和蘭	六四五、〇	四六〇、四	二一・二	六・九
瑞西	三七八、一	三五七、四	九・二	五・八
瑞典	三八九、三	一三三、三	七・一	二・三
諾威	一二三、六	一〇七、八	三・〇	一・六
丁抹	三五四、五	一八九、三	六・一	二・八
芬蘭	七〇〇、〇	六五、〇	一・七	一・〇
西班牙	一〇三、八	九五、四	二・五	一・四
墺洪國(從前の版圖)	一三三、八	七三、六	七・八	一〇・九
バンカン及び土耳古	四三二、〇	二〇八、五	一・一	三・一

* Die Wege des deutschen Ausfuhrhandels, Jahrbücher für Nationalökomie und Statistik, Bd. 116, Sechstes Heft. (Juni 1921), S. 527ff

** Wirtschaft u. Statistik.

露西亞及び波蘭（從前の版圖）	一〇九、八	五八六、八	二・五	八・七
英吉利	二六〇〇、九	九五八、八	六・四	一四・三
佛蘭西	一三三〇、四	五三六、六	三・〇	七・八
白耳義	一二六七、二	三六七、三	二・一	五・四
伊太利	一一九二、五	二六二、三	二・〇	三・九
其の他歐羅巴諸國	二〇八四、二	四〇、六	五・一	〇・六
歐羅巴合計	三三七四、八	三三一八、〇	八二・八	七六・〇
北米合衆國	二九四六、二	四七五、四	七・二	七・一
其他の歐羅巴外諸國	〇七三、二	一一三七、九	一〇・〇	一六・九
總計	四〇七三四、二	六七二一、三	一〇〇・〇	一〇〇・〇

此表によれば戰後の金額は、戰前に比して總て大に膨脹して居るが、それは物價の騰貴に基くのである。扨て之によりて見ると、英吉利へ輸出せられたる獨逸品は、獨逸の總輸出額に對して、一九一三年には一四・三%であつたのが、今は六・四%となつて居る。佛蘭西は七・八%が丁度三%に減退して居る。白耳義と伊太利とは——此二國の貿易がそれ自身減退して居るのは勿論だが——五・四%が三・一%となり、又三・九%が三%となつた。かくの如く、此等諸國への輸出は減退して居るが、その代りに他方に於て、戰時中、中立國であつた諸國への歩合は反對に增加して居る。卽ち和蘭は戰前七%足らずであつたのが、今日二一・二%となり、瑞西は戰前の五・二%が九・二%となり、又芬蘭以外の北方諸國（瑞典・諾威・丁抹）は合計にて從前は六・七%であつたが、今は一九・二%（一六・二%の誤か）となつて居る。

露西亞は戰前、獨逸輸出貿易の八・七%を占めて居つたのであるが、今日（露西亞——芬蘭以外の高原地方を含む——は僅に二・五%である。又墺洪國の時代には彼地へ一〇・九%の輸出があつたのだが、今日その繼承國への輸出は七・八%となつた。土耳古及び其他のバルカン諸國は、獨逸輸出貿易より殆ど除外せられた樣な形となつた。卽ち戰前には三・一%の輸出であつたが、今日それは一・一%となつた。

北米合衆國への輸出歩合は、殆ど變化がないと言つてもよい。一九一三年には七・一%であつたのが今日七・二に增加して居る。

之によれば大戰の影響として最も著しく目立

つものは、獨逸の輸出總額の中で、歐羅巴の中立諸國へ行つたのが、一九一三年には一二・二%であつたが、今日それは五〇・八%となつたことゝ、英吉利が戰前第一位の顧客たる地位を占めて居つたのに、今日は第六位に落ち、佛蘭西も、和蘭、瑞西、瑞典、丁抹に遙に追ひ越されて、小國諾威と同等の地位となつたことゝである。

獨逸の輸出貿易にかくの如き變化を來したに就いては、勿論、幾多の原因がある。露西亞との貿易を阻害して居る事情は、バルカン諸國や墺洪繼承國との貿易を阻害して居る事情とは、又別のものである。中立諸國との關係が非常に良好となつたのは、茲に十分確實なる解釋を下すことの出來ないほど錯綜したる原因によつてである。例へば聯合國に對する獨逸の義務履行の如きは、上掲の數字に含まれて居ないものだが、(之を含ましむれば、中立諸國と聯合側諸國との割合が多少變る)、統計的數字を材料として經濟的診察の結論を導く爲めには觀過し得ざる所のものである。

かゝる結論は――今茲に、それを爲さんとするのではあるが――非常に愼重な觀察によりてのみ導き得るものである。

その結論としては先づこう言ふことが出來る。中立國に對する獨逸輸出の恢復は急速に行ふことが出來た。それは戰爭中、中立國への貿易の阻害は、隨分甚だしかつたが、之を全然壞滅せしむるまでには至つて居なかつたからだ。國際法に違反して、中立國との貿易にまで擴げられた貿易封鎖、商業間諜、Handelsspionage 黑表などの効果は、甚だ深刻であつたのは確だが、それは中立國との貿易を阻害したに止まり、未だ之を壞滅に歸せしむるまでには至らなかつた。そして又敵國存在の獨逸財産に對して、戰時中に施行せられ、平和克復後の今でも尙明示默示に殘つて居る不利益なる諸規定に比ぶれば、自然打勝き易きものである。

平和克復後の今尙殘存して居る經濟的敵意が、世界經濟の再建を阻止する効果は、之を正確なる數字を以て表示することは固より不可能であ

る。併しその効果の表徵としては、獨逸輸出貿易が、一方伊太利や亞米利加に於けると、他方、白耳義、佛蘭西、英吉利に於けるとの、發達の相違として表はれて居る。北米合衆國に對する輸出は、既述の如く、歩合數に於ては既に戰前の狀態を恢復し且つ僅ながらも之を凌駕して居る。又伊太利への輸出も、彼國購買力の減退に拘はらず、平和時代の四分三以上に上つて居る。然るに白耳義は殆ど五分三となり、英吉利への輸出歩合は戰前と餘程の距離が出來、佛蘭西は更に大なる隔りが出來た。

敵國側(聯合側)の制裁が如何なる程度までの效果を表はすやは、他日に之を徵するの外はない。只今日既に明かなる所に就いて言へば、今や已に見はれ來りつゝある獨逸貿易發達の傾向を、更に大に抑へ付けんとすることに、彼等が全然一致し居ることである。英佛の利害に左右せられて、獨逸の輸出貿易が上述の如き變遷をなすに至つたと云ふことは、取も直さず、彼等が、戰前、獨逸貿易に於て占めしその割前の大きかつたことを、豫てより望ましからぬ事柄だと思ふて居たことを示すに外ならない。

最後の問題として殘る所のものは既に明かである。——中立諸國が獨逸と敵國側との中間貿易を發達せしむることを、敵國側が承認し又は贊同するか、否か、と云ふことである。併し彼等が之を承認すると云ふことはない。それは既に今日迄の數字が示して居る。兎も角も、ヴェルサイユとスバ、巴里と倫敦とに於て顯はされたる彼等の政策は、只、世界經濟の損害を齎らすことゝなる樣な變遷を待ち來すことゝなるだけであらう。」

(一〇・九・一五)